市民平和のつどい
映画「紅い襷～富岡製糸場物語～」上映会

出演者 ： 水島優　吉本実憂　桐島ココ　木村夏子　豊原功補　西村まさ彦　大空真弓　ほか

企画・製作：富岡市　構成・総合プロデューサー：家喜正男　作：松井香奈　監督：足立内仁章（ドラマ）、路川敬（ドキュメンタリー）
制作：NHKエンタープライズ　(C)2017富岡市／富岡製糸場映画製作委員会

平成30年
11月11日（日） 13：30～15：20（13：00開場）
横須賀市文化会館大ホール

- 映画上映（100分）※英語字幕付き

事前申込制　先着1,000人　入場無料

［申込方法］
10月11日（木）～24日（水）に代表者の郵便番号・住所・氏名・電話番号と参加人数（5人まで）を電話かFAXで横須賀市コールセンターへ。
※10月下旬に入場券（全員分）を代表者あてに送ります。

横須賀市コールセンター TEL 046（822）2500 FAX 046（822）2539
（年中無休／08：00～20：00）

会場に国際平和ポスター・標語コンクール入賞作品を展示します。

［主催］横須賀市　［問い合わせ］横須賀市国際交流課 046-822-8138

明治維新、日本の大転換期——

若き女性たちの活躍が、産業のあらたな扉をひらいた知られざる感動の物語

物語　明治6年春、長野県松代区長の娘・横田英は反対する父を説得し、松代と新しい日本の為、同郷の河原鶴らとともに富岡製糸場に工女として入場した。明治政府は明治5年、群馬県富岡市に西洋と日本の技術を融合した世界最大規模の製糸工場を設立したが、工女集めに難航していた。フランスから招いた“生糸の神様”と呼ばれるポール・ブリュナ達フランス人に”生き血を抜かれる”という荒唐無稽な噂話が全国に広がっていたからだ。しかし、製糸場に到着した英が目にしたのは、これまで見たこともない別世界、壮大なレンガの建物とピカピカの器械、そして西洋式の労働環境の中で真摯に糸を引く先輩工女たちの姿だった。全国から集まった工女たちは、紅い襷を掛けることが許されている一等工女になり、一日も早く技術を習得し故郷に戻ることを夢見ていた。その姿に刺激された英と鶴らも、紅い襷を皆で目指すことを誓った。だが現実は、フランス人教師の厳しい指導や時には待遇の差、容易ではない糸取り作業、苦労の連続だった。そんなある日、彼女たちのもとへウィーンから驚くべきニュースが届けられた・・・。

2014年、世界遺産に登録された「富岡製糸場と絹産業遺産群」。それは、かつて日本人とフランス人の女性がともに、時代を切り開いた証しです。

明治初期、日本の近代化を大きく牽引した輸出品は重厚な「軍艦」ではなく、しなやかな「絹」でした。その生産を支えていたのは、名もなき女性たちの手であったことをご存知でしょうか。故郷を離れ、新しい日本のために糸をひき続けた若き工女たちと、フランスから、製糸業を通して日本の近代化に尽力した、製糸場の首長ポール・ブリュナとエミリ夫人、そして厳しくも温かいフランス人女性教師。彼女らによって、日本に新たな産業の風が吹き込まれたのです。工女たちが、それぞれの不安や葛藤を抱えながらも、次第に身分や国境を超え、近代化という扉を自ら開いた先で手にしたものとは？そして「生糸の神様」と呼ばれたブリュナが日本に残したものとは……？近代製糸業の始まりを担った若き工女たちの姿を、長野・松代の工女・横田（和田）英の手記をもとに紐解いていきます。

横須賀市では、国際平和、国際理解をテーマに、毎年「市民平和のつどい」を開催しています。

今年度は、友好都市・富岡市が企画・製作した映画「紅い襷～富岡製糸場物語～」を上映します。この映画は、明治初期の富岡製糸場を舞台に、生糸の生産を通じて日本の近代化を担った若き工女たちの姿を描いています。当時の日本とフランスの間の国際協力、相互理解に思いをはせ、平和について考えてみませんか。

横須賀市と富岡市

富岡製糸場は、横須賀製鉄所（造船所）に勤めていたフランス人技師バスチャンが設計に携わり、横須賀製鉄所で取り入れられていた月給制、日曜休日制など、フランス式運営が行われました。富岡製糸場と横須賀製鉄所が共にフランスの協力を得て、近代日本の発展に大きく貢献してきたという共通点を縁として、両市は、横須賀製鉄所のくわ入れ式からちょうど150周年に当たる2015年11月15日、友好都市提携を行いました。